

◆ 世界遺産講演会 ◆ 講演要旨(後半)

五味文彦さん講演「鎌倉の武家文化」

平成23年6月12日、鎌倉世界遺産登録推進協議会主催・いざかまくらトラスト共催による世界遺産講演会が、きらら鎌倉(鎌倉生涯学習センター)ホールで開かれ、日本中世史の第一人者である五味文彦東京大学名誉教授にお話を伺いました。前号に続き、講演要旨後半をご紹介します。

❖ 武家文化形成の4つの段階 (続き)

源頼義、義家が鎌倉を拠点とした11世紀後半に始まり、頼朝が武家政権と武家文化の基礎を築いた第一段階を経て、第二の段階は京都文化の積極的摂取による成長である。承久の乱後、北条泰時は京都に進駐し京都の文化を徹底的に吸収する。一方では頼朝が行った撫民政策を継承し徳政を行う。さらに承久の乱による自信に裏付けられて、律令に学び武家による政治や裁判の基準である御成敗式目(貞永式目)を定めた。定めるにあたって、評定衆や御家人等に、仏教の守護神、鶴岡八幡宮の八幡神、荏柄天神の天満天神等に対して、政治や裁判を式目に基づいて公平に行うことを誓わせた。武家政権の内部規律、倫理、公平性を訴えることにより、武士という武力を持つ存在が政治を担う方向性をより明確に打ち出した。それに基づいて、鎌倉幕府は武力で事を解決するのではなく、武力を貯めて、より理非を重んじた政治を行うようになる。ここに武家政治の根幹が成立した。

それとともに、鎌倉の都市整備も行われるようになり、鎌倉の内と外を結ぶ切通の巨福呂坂、朝夷奈坂が整備され、海辺に突堤が造られ和賀江嶋ができて、海上交通も整備された。自然の要害であった鎌倉は、泰時の時代から開放的な場に移ってくる。

民衆の要望を取り入れていくうえで重要なのが大仏の造営で、これにあたったのは民衆に喜捨を求めた勧進上人浄光だが、幕府はそれを援助して大仏の造営にあたった。これに伴い京都で信仰を拡げていた浄土宗が鎌倉に入ってくるなど、今度は人々が鎌倉をめざすようになる。インドを起点として徐々に東に向かう仏教の流れの最終地点が鎌倉となり、あらゆる宗教者は鎌倉をめざした。そのなかで武家は単なる武力集団でなく政治的訓練を積んで成長し、その成果は称名寺の金沢文庫の典籍に収められ、幕府の歴史書『吾妻鏡』の編纂も行われた。

第三段階は朝廷を凌駕し、新たな権力、新たな政

治の動向をめざすという動きになる。そこには大陸の文化が重要な役割を果たす。ひとつは建長興国禅寺、国を興す禅寺の建立である。禅宗は修行によって悟りを得、經典やその注釈を学ぶ。それが武士の精神修養になり魅力的だった。また宋代の禅は公案禅などを工夫したこともあって、国家構想を考える武士に受け入れられる仏教になっていた。時頼の招きで渡ってきた禅僧は国家護持の思いが強く、その影響もあって時頼の死後に若くして政治指導者となった子の時宗は、モンゴルの襲来に強硬に対応し、二度にわたるモンゴル襲来を広く御家人を動員して凌いだ。時宗は合戦で亡くなった人々の霊を慰めるため、建長寺に次ぐ禅宗寺院として円覚寺を建立し、宋から招いた無学祖元を開山とした。

第四の段階は、日本独自の武家文化の醸成である。次に執権を継いだ貞時は禅宗について深い理解を持つようになる。五山の制度もこの頃という説もあるように手厚く禅宗を保護した。大挙して禅僧が中国にわたると同時に、夢窓疎石のように、独自の日本的な禅をめざす者も出てくる。禅宗だけでなく大陸文化が日本社会に入り込んで、従来の文化に融合しながら日本的な文化、武家文化という形で成長する。禅寺も、鎌倉では谷戸にあり、山林の彼方ではなく、都市の近くの静寂な環境の中で、精神を鍛え、悟りを得ることを課題とするような武家文化が生み出されていった。

鎌倉幕府が成立したのは1180年、大体50年で武家文化の基礎が固まる。それから100年かけて武家文化、武家政治が様々な訓練を積みながら成長してきた。鎌倉で成長した武家文化は、京都や各地に大きな影響をあたえ、庭園や建築、芸能など各方面で発展し、今日につながる日本の伝統文化を形成するに至っている。

❖ 鎌倉は世界遺産登録のための体制づくりを

鎌倉が世界遺産になるための課題はたくさん残っている。ひとつは文化財行政の体制が重要だ。それを進めるのは市民の守ろうとする意思である。鎌倉の重要な世界遺産の核になる山をもっと大事にしなければならない。もし震災が起きたとしても、山は我々を救ってくれるわけだ。しかしながら山林の乱開発は未だに終わっていない。世界遺産は「より良い住環境をつくる」ということであると、鎌倉は世界に宣言する。原点に立ち返って市民の森であり山であるという基本をしっかりと守っていく。行政もそのための体制を建てる、という備えをしてほしい。